

# 街場の就活論 vol. 29

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ  
団 遊

## ウソ、ほんと

先日、大学の授業中に、とある学生から「私には家業があり、いずれそれを継ぎたいと思っている。ただ、そのことは就職活動中、企業の面接官に話さない方がいいと就職指導員に言われたが、本当にそうだろうか？」と尋ねられた。

大学生にインターンシップ先を斡旋する会社を長く経営する友人は、常日頃「大学生の就職活動は、うまいウソのつき方を学ぶ場であり、壮大な化かし合いだ」と憤っている。

多くの大学生は、エントリーシートの提出にあたり、「志望動機」を書くことに困る。何十もの企業に個別の志望動機を書かねばならないのだから、困るのも無理はない。そこで、就職指導員たちの協力を得ながら、自己分析を重ね、志望動機を探す旅に出る。

中には、「私はどんな仕事に向いていますか？」という学生の質問に対して 30 分ほどのヒアリングを経て「サービス業がいいと思うよ」と真顔で回答する就職指導員もいる。背中を押すという意味もあるのだろうが、驚くしかない。

エントリーシートには志望動機記載欄が必ずある。しかし一方、企業の中で「新卒学生に対しては、志望動機を聞かない」という流れも出始めている。この時点での志望動機を聞いても、選考における材料にならないと考えるからだ。

企業が志望動機を求めるのは、面接官や経営側が「その人を雇う納得感」が欲しいからだろう。納得して入れた人の方が活躍するかどうかは、正直わからない。ただ、納得して入れた人の方が、指導の際に愛情が注ぎやすく、ダメなときに諦めがつきやすい面はあるの

かもしれない。

人材の採用は統計データに基づき AI（人工知能）に任せた方が効率的だという声も徐々に大きくなってきた。AI は“納得感”といった情緒的な要素は一切考慮しない。基本的には、現在在籍する活躍社員の思考や行動を分析し、いくつものファクターに落とし込み、合致する要素が多い志望者を有望だとみなす。しかし、このやり方で残る人材の有能さは、現在の業務の延長に会社の発展があると考えられる場合だけだという声もある。今企業が求めるのは「イノベーションを起こせる人材」なのだそう。

そもそも就職活動という、制度自体が疲弊気味なものに疑いなく乗っかる大学生にイノベティブな人が含まれているのかが怪しい、という声も根強い。知り合いの人事に「兵隊はリクナビで、将来を期待する人材は一本釣り」と公言してはばからない人もいる。

大学生と就職活動の話をしていたときに、「アルバイトは長期ですのと、短期を繰り返すのとでは、どちらが有利か」を気にしていた。先輩たちからは、長期の場合は長く働いたからこそ感じられたことを強みに、短期の場合は、柔軟に環境に適応できることを強みに落とし込め、とアドバイスされるそう。

企業の人事担当者の大半は、「学歴や過去は問わない、大切なのはこれからだ」と言う。ずいぶん前から、受験票に大学名を書かせない会社もある。しかし、そのような会社の人事が、受験者のフェイスブックやツイッターをサーチして裏を取ったり、本人が選考過程では語らない情報を収集したりすることもある。

昔、私の会社で「じゃんけんに三回勝ったら採用」という、実にわかりやすい選考方法を採用したところ、ずいぶんとお叱りの電話をいただいた。お叱りの内容を一言でまとめると「ふざけるな」ということだったが、面接官が己の知恵と経験で人を判断することと、どちらが「ふざけている」と感じるかは、人によるのではないだろうか。

就職活動そのものに疑問を感じドロップアウトしてしまう大学生も毎年一定数排出される。このあり方もまたパターン化されたもので、特段思考力が高いとも言えないのだが、彼ら、彼女らは第二新卒とラベルされ、日本では一般的に厳しいスタートを強いられることが多い。

「やりたいこと」と向き合うために、欧米にならい、大学を出てすぐ就職するのではなく、モラトリアム期間を、長期インターンや留学といった形で持つべきだ、という人もいる。ただ、そう主張するのは、本人がそのような期間を経て社会人になり、かつ現在の自分を

肯定できている人に多いのも事実だ。

人が人を見定める、などということは前提として、できないのだろう。しかし、それを仕事でしなければならない人がある。1,000人の面接をしてきた、と胸をはる元人事が「見抜き方」や「対策」の本を出し、そこそこヒットする。一方で、内定獲得ゲームとたまたま相性のよかった大学生が「取り方」や「対策」を後輩に伝授し、得意顔でキャンパスを闊歩したりする。

どこまでがウソで、どこからがほんとなのか。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な5つの会社を経営する一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。